

東京洋傘

菅澤勝美

洋傘職人ひとすじに七〇余年。体に染み付いた匠の技が、長く愛される一本を生み出し続ける。



すがさわ かつみ ●

1936年生まれ。18歳で洋傘職人・矢口義明氏に弟子入り。2019年、東京都伝統工芸士に認定。

東京都中央区東日本橋 3-9-7



生地と親骨を縫い付ける「中綴じ」の作業。傘の美しいシルエットはこうした精緻な作業から生まれる

意識せずとも身体が動く 染み付いた技は失われない

上/生地を裁断する際に用いる型は、傘屋の“心”ともいえるもの 下/現在、菅澤さんが傘を納めるのは、東日本橋で1930年に創業した洋傘専門店「小宮商店」。菅澤さんが仕立てた傘は持ち手が付けられて店頭に並び



美しくも開きやすい 用の美を追い求める

留め紐を外し、生地をほぐして傘を開く。その動作がこれほど様になる人はいないだろう。鮮やかな一挙動は、これまで何万回と繰り返してきたであろう職人人生を物語るようだ。平成三〇年（二〇一八）に「東京洋傘」が東京都の伝統工芸品に指定されると、その翌年には東京都伝統工芸士にも認定された菅澤勝美さん。十八歳で洋傘職人の道に進み、八九歳を迎えた今も、傘づくりに向き合い続けている。

洋傘は、嘉永七年（一八五四）、ペリー来日の際に持ち込まれて憧れの的となり、明治初期には東京に洋傘製造会社が誕生。東京の職人が作り出す国産洋傘はたちまちに



「今の若い職人さんは腕の良い方が多くて頼もしいですよ」と菅澤さん

広まり、明治後期には日本の主要輸出品目に。昭和四〇年（一九六五）、日本製の洋傘は生産量・消費量・輸出量で世界一を記録した。

そんな洋傘の華やかなりし時代を見つめてきた菅澤さんは、茨城県新治郡（現在の土浦市）に生まれた。「米農家であった父は俵を編むのが上手でね、その血を引いたからか、私も子どもの頃から手先が器用でした」。十八歳の時、親戚の紹介により師匠・矢口義明氏の下で修

業を始める。「徒弟制度というと非常に厳しい印象があるでしょう？ところが、師匠はほとんど怒らない方で、傘についても頭ごなしに教えるのではなく、『まずはやってごらん』と自由にやらせてくれました」。持ち前の器用さと好奇心、そして真面目な姿勢。菅澤さんの人柄を買った師匠は、二歳年下の妻・一子さんとの結婚式も挙げてくれた。

弟子入りから五年後、二七歳で独立を果たすと、仕事を求め問屋回りが始まった。「私の性分は一言で言えば、ばか丁寧。仕事は次々に舞い込んできましたが、私が一本作る間に、職人仲間には二本作る。いかに手早く質の良い傘を作るか、当時はそのことばかり考えていましたね」

小さなもので合わせると数十種類の部品で構成される洋傘。菅

澤さん達、洋傘職人は生地の裁断に始まり、持ち手の取り付けを残し、全ての工程を手掛ける。若い頃から追求し続けているのは、生地の張りが美しく、開きやすい傘。その為にも「どんな時でも必ず見本張り（試作）をすること」を大切にしているという。「昔から作られている生地でも、硬さが変わっていることもあります。手間だと思わずに見本張りを一本作っておけば、その後は安心して仕事を進められる」。ものづくりとは、着実に、誤りのない一歩を積み重ねること。菅澤さんの何気ない言葉の一つ一つが、職人のあるべき姿を示している。「年を重ね、目が悪くなっても、傘の作り方は身体が覚えていてくれる」と菅澤さん。この先も傘職人の高みへと

終わりなき道を歩み続けていく。